



# ふるコンだより

発行責任者  
宇部市ふるさとコンパニオンの会  
会長 脇 彌生

コロナ禍が3年以上も続くとは思ってもみなかった事でしたが、やっとマスク着用の要請が解除されて、個人の判断にまかされることとなりました。とはいえ、ふるコン会員は念のため、ガイド中しばらくはマスクを着用します。ですが、まち歩きなどに参加される皆様は、どうぞマスクの下に隠れていた笑顔をまた見せてください。徐々に以前の感じを取り戻したいと思います。それでは、令和4年度後期イベントの振り返りとともに、各種話題を紹介します。

## てくてくまち歩き「美しい干潟を散策しながら遺跡・古墳巡り」 11/3

午前10時、参加者21名は集合場所の古尾八幡宮を出発、先ずは神社前のスポーツ広場を見下ろして「波雁ヶ浜製塩遺跡」です。

昭和30年頃は建設ブームで、ここは工事材料の採砂場となっていました。掘り進むうちに途中から大量の素焼きの土器類が出土したのです。1961(昭和36)年、正式に発掘調査が行われ、この場所が古墳時代後期(6~7世紀)の製塩遺跡であることが明らかになりました。

出土品は、製塩に使われた土器や、お供え用の祭祀遺物で、その数は300点以上にものぼりました。中でも「滑石製石馬」の出土(※1)は、貴重な考古資料として市の文化財に指定され、現在「学びの森くすのき」に保管されています。

※1：国内では、宇部市と福岡県宗像市の2例しかない



「滑石製石馬」

次に海岸に出て、防潮壁沿いに日の山を仰ぎ見つ歩きました。防潮壁が途切れた所が駐車場、植松川にかかる若宮橋を渡ると、夏場は海水浴客で賑わうキワ・ラ・ビーチに出ます。目の前に、いきなり広大な干潟が出現。遠浅で、沖合には秋穂の竹島が浮かび、眺望抜群のこの干潟は日本有数を誇り、渡り鳥の休息地であり、潮

干狩りや、子供たちの磯遊びの場ともなっています。

ビーチ横の階段の上は木々に囲まれた小さな丘になっています。ここが「若宮古墳群」です。



3号墳

古墳時代後期(1400年前)のもので、横穴式石室(1号~5号の番号が振られた)5基があります。内訳は遺体を収める玄室と土器や装飾品等を収める前室をもつ複室構造が2基、玄室だけの単室構造のものが3基となっています。

横穴式石室の構造が分かりやすい3号墳は見学用にそのままの状態に残され、副葬品が最も多く発掘された4号と5号墳は、保存のために埋め戻して丸く土を盛って芝が植えられ、円墳の形に整えられました。



掲載の写真は4号墳から出土した土器で、その頃の殆どの器種が揃っており、宇部市で初めて出土した横瓶をはじめ、完形品34点は市の文化財に指定されておま

す。その他、装身具類もメノウ製勾玉、水晶製切子玉、碧玉製管玉、耳環などカラフルな物が多数出土しており、このように多量の土器や装身具の出土例は市内の古墳では初めてのことだそうです。

では、被葬者は誰か?規模の大きさと、製塩遺跡と時期が同じであることから、製塩に携わった人達を始めとする東岐波一帯を支配していた豪族の墓であろうと考えられています。

干潟を10分ばかり歩くと岬の付け根に「月崎岬古墳群」があります。



先の若宮古墳よりも50年~100年ばかり新しい古墳で、横穴式石室が2基あり、糸を紡ぐ時に使う紡錘車(糸ぐるま)や多数の須恵器片が出土しました。

ここを出て少しばかり後戻りすると右側の低木林の中に「月崎縄文遺跡」の標柱があります。ここは縄文時代の海浜集落跡です。縄文時代前期(6000年前)の集石遺構や、後期(4000年前)の住居跡のほか、たくさんの縄文土器片や、石鏃、石斧、石錘などが出土しております。特に土器は、前期から後期に至る長期間の物が出土しており、土器の変遷を調べる上で、重要な遺跡となっています。山口県内には74か所の縄文遺跡がありますが、その殆んどが、いつ頃の小文化期なのか不明瞭、又は一

時期に生活した小規模なもので、ここ月崎のように数千年にまたがって生活した例は大変珍しいとのこと。海の幸、山の幸に恵まれ、環境的にも快適であった



からではないでしょうか。

出土品の写真を見て、太古の昔に思いを馳せた後は、日の山の麓を通り、出発地の古尾八幡宮へと戻りました。宮崎宮司のご厚意で、北前船の船頭（船長）を務め、後に岐波の偉人と言われた三保虎五郎が樺太から持ち帰り奉納したという、トナカイの角を見せて頂くことが出来ました。（岡部）

**てくてくまち歩き「中也『思ひ出』への物語、れんがのある風景を歩いてみませんか」**

11/27

11 月末とは思えないほど暖かく天気の良い日になりました。「中也の『思ひ出』—海と煉瓦工場」に出てくる煉瓦工場や海辺の描写が、地名は書かれていないが村松辺りでは？という宇部日報連載記事に触発されて企画した今回のコースに、27 名のご参加を頂き、2 班に分かれ白土海岸を出発しました。

近くの墓地には真河内の溜池を灌漑用に大改修するなど領地経営に力を注いだ和智元郷の「宝篋印塔」（ほうきょういんとう）が建てられています。



和智元郷の墓の説明板と宝篋印塔

次に白土停留場跡に行きました。宇部線が宇部鉄道と呼ばれていた頃、昭和 4 年から昭和 18 年まで 14 年間、駅舎もなくバス停のような停留場だったそうです。そ

こから先、煉瓦工場がたくさん出来たのが納得できる赤っぽい粘土質の土地を確認し、140 年前頃から 3 代にわたり家を守ってきた約 30m ほどの赤色煉瓦塀を過ぎると村松海岸が見えてきました。

**村**松海岸には滞（みお）と呼ばれる人工の水路があり、煉瓦や漬物などが船で運ばれていましたが、当日は潮が満ちて滞の跡が見られなかったので写真を見て頂きました。道路に戻ると近くには米屋牧場の倉庫として使われている煉瓦工場跡があり、大正の終わりにタイムスリップしたようでした。



煉瓦工場跡（現在は米屋牧場倉庫）

**細**い道を海に向かって進むと「嶽ヶ鼻（たけがはな）」と言われる絶景の断崖があり、そこからの景色はまるで南の国の海を見ているようです。ただ、天気の良い日に見える国東半島の山々が霞んで見えなかったのが少し残念でした。

かつては水中競馬が行われ、現在は海水浴場としても賑わう白土海岸に戻って、地域資源活性化のために始まった「サンセツフラフェスタ」が 3 年ぶりに開催された話などをしました。またシャワー室が宇部市制施行 100 周年記念事業で、西岐波中学生徒によって「海」をテーマにした壁画が描かれ鮮やかに生まれ変わりました。その継続事業として昨年 10 月末、横の壁にたちばな幼稚園児が描き、さらに裏の壁は、西岐波小児童が描く予定です。海水浴シーズンには、皆さんにご覧いただけることと思います。（伊藤）

**てくてくまち歩き「周防・長門の国境石、石鍋、石風呂」**

1/21

**川**上ふれあいセンターの史跡マップの前でルートや見学ポイントを確認し、20 名の参加者

と 4 名のスタッフは 2 班に分かれて出発しました。

最初に川上中学校の敷地内にある周防と長門の国境石碑へ行きました。校長室の床には国境を示すテープが貼ってあります。

次に平安時代末から室町時代にかけて西日本を中心に使用された滑石製の石鍋の未成品を多く出土した下請川南遺跡を見ました。滑石は爪で傷がつくほど柔らかいので加工しやすく保温性も高く、「石鍋 4 個で牛 1 頭」の値打ちのある高価なものでした。請川一帯には滑石の鉱床があり、ブロック状の塊を削り取り、ノミで削って石鍋の完成直前までを加工したようです。

それから西岐波吉見線の旧道を行きまわって歩いて西山分校跡へ行きました。



西山分校跡

1867(慶応 3)年から 1876(明治 9)年まで岡本四郎兵衛が請川の農家の納屋で寺子屋を開いたことが、のちの西山分校につながります。1892(明治 25)年から 1973(昭和 48)年まで請川の 1, 2 年生が複式学級で学びました。分校の隣の明神社は 1733(享保 18)年に請川の住民により建立され、明治時代南方八幡宮に合祀されましたが、地元で災害が起こったため地区民の強い要望により再び元のおりに祀られることになったと言われていました。

さらに歩いて石風呂入口に行きました。石風呂は明治時代初期に永山兵蔵が本人や地域の人々の健康を願って作られました。奥行・幅ともに 2.5m、高さは 1.9m で、出入口は幅 0.6m、高さ 0.8m です。「石風呂を保存する会」が保守・点検・環境整備をされ、石風呂体験会も開催されていましたが、コロナ禍で現在は中止です。

**向** 講内の汲川（柄杓や竿で汲む浅い井戸）を見て、王蘇山安楽寺に行きました。中大兄皇子（のちの天智天皇）が筑紫路に行啓され、この地で病に倒れられた折、老翁が差出した薬によりたちどころに蘇られ、この山を王蘇山と名付けよと言われたと伝わっています。

最後に岡本四郎兵衛のお墓にお参りして、川上ふれあいセンターに戻りました。（池田）

**第 29 回 UBE ビエンナーレ**  
**（現代日本彫刻展）**  
**\*作品のいろいろな楽しみ方\***

ビエンナーレ作品は屋外彫刻ですので、時間や天候によって、見え方が大きく変わります。みなさんが良く知っているあの作品も色々な表情を見せてくれます。



「ディスタンス」西澤利高  
 アクリル板の研磨の角度で日光が屈折して、歪んだ景色や面白い影を作りだしています。



「wind whisper」平山悟  
 夜の作品です。残念ながら、現在はライトアップしていないので、見ることはできません。屋間もいろいろな顔を見せています。



屋間は反射した光が地面に広が

ります。

今回の作品の中から、ほんの一部を紹介しましたが、既存の作品にも何か見つかるかもしれません。宇部の野外彫刻は、触ってみて、いろいろな角度から鑑賞して、楽しむのが基本です。

（信濃、西山）

〜〜 「一枚の絵馬から」 〜〜

「北前船」と藤曲村の廻船問屋



藤曲村佐貫家奉納「船絵馬」(廣福寺本堂内)

この廻船(北前船)の絵は藤曲村の佐貫家から中山の廣福寺に奉納された「観音丸」の絵馬で本堂に掲げてあります。

1734(享保19)年に萩藩に差し出された防長地下上申によると、藤曲村には船が45艘あり、そのうち廻船が6艘、五枚帆船が32艘、漁船が7艘あったと記録されています。

**西** 宮八幡宮の石段下には左側に藤曲村の廻船問屋の大和屋源兵衛、西野屋喜八、右側に松谷辰右衛門の家紋と名前が刻んでありますが、1854(天保5)年、石段と玉垣を寄進しており、「古地図を片手にまちを歩こう藤山」のコースでご覧いただけます。

今年1月末、孫のお宮参りで富山市に行った際、岩瀬の廻船問屋「森家」と隣の「馬場家」に立ち寄りました。どちらも北前船により財を成した豪商で、明治11年に建てられた森家は国の重要文化財に指定されています。森家ではボランティアガイドの方が常駐されており、パワフルで面白い説明を受けることができました。

**罫** 炉裏の切られた母屋のオイの間(広間)の神通川を模した畳の並べ方、商売繁昌をかけての半畳や隠し金庫、吹抜けの木組み、土蔵の扉の虎と龍の鰻(こ

て)絵、トイレには屋久杉の板戸、土間は小豆島産御影石の一枚岩など、材料を吟味し贅を尽くした当時の繁栄ぶりが偲べれます。



富山市岩瀬廻船問屋「森家」のオイの間

**北** 前船は、江戸時代から明治時代にかけて船主が自己資本で買い入れた商品を他の土地に運んで売りさばっていく「総合商社」のような船のことです。春の彼岸頃大阪を出発し瀬戸内海の寄港地で米、綿、塩など安く買い、下関を廻って日本海に出て、取引のある港に寄りながら蝦夷(北海道)へ向かいます。江差、松前、函館などの港で積荷を売りさばいてから、肥料として重宝されたニシン粕、昆布、サケなどを仕入れて、夏の内に北海道を出て台風時期を前にまた瀬戸内海を通過して晩秋から初冬の頃に大阪に帰着します。往復で商売するので倍倍方式に儲かる「バイ船」とも呼ばれました。



森家船絵馬(絵馬藤作)と隠し金庫

**岩** 瀬の森家は、江戸時代には四十物屋(あいもんや)仙右衛門を称し、「千石船、一航海で千両の利益を上げる」という北前船で財を成しました。四十物(あいもの)とは塩魚類の総称で、

北前船の船主や廻船問屋は四十物屋を名乗ることが多かったのだそうです。

室内には、模型の北前船が3艘ありました。船模型は船を新しく造る時に、船大工から船主に贈られるもので多くは実物の20分の1の大きさです。

**北**前船・帆船の絵が数枚展示されていますが、この船絵馬は三角の帆がついています。明治中期になると三角帆が採用され、少しは風上に向かって航行が出来る構造に変わっています。絵馬の下には隠し金庫があり、重い扉を開け、中から取り出されたのは分厚い「肥料台帳」でした。岩瀬地区が春になると肥料を求める人で大賑わいだったのも頷けます。その後、汽船の発達や鉄道網、通信の普及などにより、北前船は1880(明治13)年頃から急激に衰退しました。

**北**前船の絵馬の多さと図柄が似ているのが気になり調べてみました。「船絵馬の世界」(探検コム)によれば、北前船に関係した地域の神社には、よく「船絵馬」が奉納されています。これは船主や船乗りが航海の安全を祈願して、あるいは無事航海を終えたことに感謝するために地元の神社に奉納されたものです。

**船**絵馬を奉納する文化は、北海道と大阪を日本海側で結ぶ北前船の繁栄とともに拡大し、その後、200年ほど存続、1882(明治15)年頃に終焉しました。初期にはかなり不正確で稚拙な作品も多かったようですが、やがて大阪を中心に船絵馬専門業者が誕生します。「吉本善京」や「絵馬藤(えんまとう)」などの専門の絵馬師により描かれました。また、それぞれの船絵馬の帆に描かれた黒い線の模様は「帆印」といって、船を遠くから見分けられるように描いたものです。

**全**国から殺到した注文をさばくため、1849年、吉本派の3代善京は下絵を版画化し、量産態勢を取りました。これで大きくコストダウンが実現し、船絵馬はより低所得層にまで広がっていきます。

しかしながら絵柄の画一化とともに、徐々に船絵馬の人気は落ちていきました。図柄がほぼ同じことがこれで納得できましたが、色鮮やかで鮮明に残っています。

一昨年、宇部市の西宮八幡宮で山口狛犬学会の会員により県内初となる「越前狛犬」が発見されました。

これまで島根県益田市の神社のものが最西端でしたが、越前から北

前船によって宇部に運ばれたことが推定されます。越前狛犬は福井市の足羽山(あすわやま)で産出する柔らかく細工がしやすい灰青緑色の笏谷石(しゃくだにいし)で作られ、おかつば状のたてがみが広く一直線に垂れ下がっており、雄々しい表情が特徴。この狛犬は神殿用のもので高さが37cmと小ぶりです。



西宮八幡宮の「越前狛犬」

**中**山廣福寺の「船絵馬」と西宮八幡宮の「越前狛犬」は、江の内開作ができる1690(元禄3)年まで西宮八幡宮下が海であったことを考えると、藤曲村の廻船問屋が当時から広く交易していたことを物語っているようです。(脇)

### まち歩き予定表

日時	集合場所・距離	内容
4/22(土) 9:30~12:00	市役所バス停前 約4km	てくてくまち歩き「ふるさとの川・真締川に架かる橋の数々、歴史の生き証人は面白いんです」
5/20(土) 9:50~12:00	西部体育館前 約3.5km	てくてくまち歩き「曙光みなぎる桃山へ」(国)登録有形文化財の旧桃山1号配水池監視廊入口、桃山配水計量室(桃色れんがの六角堂)、3号配水池の展望塔からは市街地や周防灘が一望できます
5/28(日) 9:50~12:00	ときわ湖水ホール前 約2km	てくてくときわ公園「ときわ公園で動物たちの好きな物 見~つけた~ここにあったよSDGs!」
6/10(土) 9:50~12:00	ときわ公園正面入口 約2.5km	てくてくときわ公園「ときわ公園で花めぐりをしよう!」ハナショウブ、アジサイ、スイレン、シャクナゲが楽しめます
6/25(日) 9:50~12:00	ときわ公園正面入口 約2km	てくてくときわ公園「常盤池(湖)・夫婦岩池の水が滝になって流れ落ちるんです!」荒手(あらて)、苧漕場(おこぎば)に出現する二つの滝を巡る

■申し込み、お問い合わせ ※定員30名、受付は開催日の一ヶ月前からです。当日連絡先 090-9060-9752 (脇)

てくてくまち歩き

宇部市観光交流課

TEL(34)8353

FAX(22)6083

てくてくときわ公園

宇部市ときわ公園課

TEL(54)0551

FAX(51)7205

